
二極の子～乱世風雲児～

shinsoku1120

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二極の子ゝ乱世風雲児ゝ

【Nコード】

N0211Z

【作者名】

shinsoku1120

【あらすじ】

かつて、絶対強者といわれた魔王がいた。強さゆえに孤独。永き時を孤独と共に過ごした魔王は遂に永遠の伴侶を得る。

かつて、敵である男に恋こがれた女がいた。永き時を想い続けた彼女は遂にその想いを遂げた。

魔王と勇者が結ばれた300年後。

世界は動乱の幕をあげる。その中心には一人の少年の姿があった。

あらすじはあくまでもあらすじなので適当に読み流してください。

プロローグ 300年前

夜天の空に浮かぶ朱に染まった月が雲の切れ間から顔を覗かせる。
その月明かりに照らし出されたのは、堅牢な城塞と呼ぶのが似合う城。

解き放たれた城門を入ったところに広がる大広間。

そこには、物言わぬ屍が散乱していた。

人の形をしたものの中、翼や角を生やした人外の屍も転がっている。

それらを背に広間の中央の階段を歩むものがある。

背中に流したブロンドの髪は月光を跳ね返し、燐光を纏っているように見え、蒼に輝く瞳は赤い光の中にあっても飲まれることなく存在を主張していた。

見目麗しい彼女の名は、イニス・フェイルノート。
最強の勇者の名と共に広く知られる彼女の存在は、此処エクスゲニアにおいて勝利の代名詞でもある。

彼女が立つ戦場において、人々は敗けを知らない。

ただ今日この時まで。

城の名は知られていない。

ただそこにあるだけで恐怖と畏敬を抱かせ、その城主の力を見せつける。

ゆえにその城は魔王城と呼ばれている。

その城の二階。謁見の間。

広大な空間と奥に設けられた玉座は、簡素にして美麗。

無駄な装飾は一切なく、全てが魔術的役割を持っていた。

謁見の間の中央に敷かれた赤絨毯を歩むのは、勇者であるイニス・フェイルノート。

部屋の主は、玉座の脇に立ち窓から見える朱月を見上げている。

玉座の下までたどり着いたイニスがその背に、言葉をかけた。

「お久しぶりです。レオスト・リオルティス」

「イニス・フェイルノートか。久しいな。息災か？」

ゆつくりと振り向いたレオストは、ごく自然に微笑み、勇者を氣遣った。

「それは、皮肉ですかレオスト。この姿を見て息災に見えるのなら貴方の目は節穴ですよ」

白銀だった聖鎧は敵か味方かの血にまみれており、顔にも飛沫が飛んでいる。

「ははっ、違いがないな。ひどいものだ。」

「まったく。想い人の前にこのような姿で出なければいけなかった私の気持ちも察してください」

「それはすまなかったな」

そう言ってイニスへ近付き、指から黒い炎を放った。

彼女にまわりついた炎は、レオストが認識した全ての不浄を取り除いた。

炎が消えた後には、数段輝きを取り戻したイニスの姿があった。

「ありがとうございます。」

「気にするな。俺なんかを追いかけてこんなところまで来てしまった乙女への謝礼と、これからの心踊る時間への投資だ」

本気とも冗談ともとれる口調でレオストは笑った。

伏せていた顔を上げてイニスはレオストに話す。

「ながらく、お待たせしました。」

「ああ。永き時を待ち続けた甲斐があった。お前のような強者と巡り会えたのだから」

見るものを恍惚とさせる微笑みを浮かべレオストはしみじみと呟いた。

「さあ、はじめようか。待ちわびた逢瀬を」

言と共に左手に幅広の大剣が握られた。無銘の剣。だがイニスがこれまでに見たどのような剣よりも、力を持っている

ことがその存在感から知れる。

闇そのもののような暗黒のオーラを立ち上らせるそれはまさに魔剣。
対抗するように彼女も武器を抜く。

イニスが抜いたのは、光に満ちた聖剣。
白光を纏ったそれは、かつてレオストが神を説得して（脅して）貰
い受けた（奪い取った）聖剣。
直剣を基礎としたそれはレオストが持つそれより幾分小さい。

それをイニスは下段に構え、マナを高めていく。

対するレオストは剣を握った手をたらし、自然体で待ち受けている。
しかしその体はエーテルが充実していき、切りあいには備えているの
がわかる。

先に動いたのはイニス。
風のように二人の間を詰めると聖剣を下からレオストに叩きつけた。
金属が連続して響く。

初撃が防がれたと見るや、手首を返し連続して斬撃を加えていく。
幾本にも分裂して見える聖剣と魔剣は互いが互いを防ぐ、ある種の
結界となっていた。

しかしその中の一本が決壊を抜けレオストを捉えた。

レオストは反射的に横へ飛び距離をとった。

「一本では手数が足りんか。速くなったな、イニス」

嬉しそうなレオストは左手にも魔剣を転移させる。

右手の剣と寸分も変わらない二本目を構え、ニヤリと笑う。

「二刀流。使うのはなん十年ぶりか。全力を出すことがこれほど楽しいとは、な！」

襲いかかってきた聖剣を防ぎながら、笑みを深めるレオスト。

「約束、覚えていますか？」

不意にイニスが言葉をもらす。

剣撃の音に紛れてしまうような細かい声だったが、魔王の聴覚はその声を拾っていた。

「当たり前だろう。俺を満足させられるほど強くなったら、お前を貰ってやる、だろう？」

「ええ、この日をどれだけ待ちわびたか。貴方には私のすべてを見て欲しい」

聖剣が振るわれる速度が上がっていく。

二本の魔剣が織り成す壁に弾かれるが、その感覚が短くなって行くにつれレオストの顔から余裕がなくなっていく。

「まだあがるか、イニス！」

「閃光爆ぜろ！」

省略詠唱によりワンフレーズで発動する魔術が爆ぜ防いだレオストの体勢を崩す。

再び、レオストの体を聖剣が捉えることになった。

戦いは数刻に及んだ。

二人は服は破れ、鎧はへこみ、体は傷だらけだった。

「そろそろお開きにしよう。楽しかったよイニス」

「満足、したのですか？」

「十二分に。イニスは約束を守った。なら、俺もそれに応えなくては、な」

レオストは照れたように頬をかき言葉を探した。

「イニス……俺はお前が愛しい。今まで絶対的な力ゆえに孤独だった俺の領域に登ってきたお前が欲しい」

一步一步、二人の距離を詰めるために、レオストは足を踏み出す。

「だからイニス。俺の側に居てくれ。悠久の時を俺と共に過ごしてくれ」

レオストは手を伸ばした。

その手を取り、イニスは頬を紅潮させ、積年の想いを遂げた。

此の戦いより300年後。一人の少年が旅立つことにより物語は始まる。 予定。

ブログ 300年前（後書き）

なんとなく出来ちゃいました。

設定なんかはこれからなので続くかは不明です。

すみません。

少しでも読んで思ったことを感想で貰えると指針になるので嬉しいです。

第一話 旅立ちと人助けといさかい

木々がうつそうと繁る森のなか、一軒の家の前に三人の人影があった。

「お兄ちゃん、本当に行っちゃうの？」

「ごめんな、ミオナ。時々帰ってくるから、な？」

「忘れ物はないか？」

「大丈夫。武器も荷物も蔵の中。外套ひとつかぶつとけばいいんだから楽なもんだよ」

「大丈夫よレオ。レイなら大抵は素手でも問題ないわ」

「戦闘のことは心配してないさ。ただ生まれてこのかた我等以外との関わりがないだろう？心配事は尽きないさ」

「そうなのよね。ちゃんと友達つくれるかしら？」

「大丈夫。なんとかなるよ。いざとなったら魔術もある。最悪転移して逃げ帰ってくるから」

両親は顔を見合わせて苦笑した。

「いいか、レイアス。お前の力は世界を敵にまわしても勝ちを拾える。神を相手にするより遥かに楽なもんだ」

「だからね、レイ。くれぐれも手加減を忘れちゃ駄目よ。蟻を殺さず踏み潰すように細心の注意を払ってね？」

「大袈裟だよ。大丈夫。無駄な殺生はしない」

ひらひらと手をふって外套のフードをかぶった。

「お兄ちゃん……」

見送る二人によく似た少女が兄を呼ぶ。

「それじゃ、俺いくよ。そのうち一度帰ってくるから。元気でね。ミオナ、いい子で待っていてくれよ」

両親と妹と十数年住んだ家に背を向け、歩き出した。

見送る二人に涙はない。

我が子の非常識さを憂いてばかりだった。

齢10になる妹は兄の背中をじっと見つめていた。

そんな旅立ちには既に数日前。

レイアスが街道を歩いていると、背後で土煙が上がっていることに気がついた。

どうやら馬車が猛スピードで駆けているらしい。

取り敢えず脇に避けると、馬車は目の前を駆け抜けていった。

続いて猪型の魔物も馬車をおい駆け抜けていく。

そのさまを見送るとレイアスはふたたび街道を歩き出した。

しかし、しばらくいくと先程の馬車と魔物が戦闘になっていた。

馬車がわにはすでに死傷者が出ているようだ。

無視をする気にもならなかったレイアスは、一応という軽い気持ちで声をかけてみた。

「大丈夫？手伝おうか？」

「助けてくれ！こちらの手に負えない！」

はあ、と気の抜けた返事をしたレイアスは、魔物を蹴飛ばした。

「なっ、きえっ……」

なにやら驚いているが、関係ないと、魔物へむけ殺気を向ける。

見たところ、それなりの強さを感じるため、己の不利益になる戦いを避ける程度の知能はあるはずとレイアスは践んだのだ。

読みは当たり、しばらくにらみ合いが続いたがやがて魔物はきびすを返した。

先程、魔物と切り結んでいた剣士がレイアスに寄ってきて礼を述べる。

「ありがとうございます。あの、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「ノーティス。大したことはしてないから気にしないでいいよ。じゃ、これで」

「あ、あの！」

立ち去ろうとしたレイアスに少女の声がかかった。

足を止めたレイアスに駆け寄っていくのは、同じ年くらいであろう少女だった。

「本当にありがとうございました。いまはなにもお礼は出来ませんがトティスハイムにお立ち寄りの際は、ヴェルデ家の屋敷を訪ねてください。必ずお礼をします」

「いや、お礼は嬉しいけどさ、君が家財を自由にできる訳じゃないだろう？」

「その点は大丈夫です。それでも私、現当主ですから」

「……へえ……。その若さでねえ」

「はい。なのでお気になされず。そうですね門番がわからないと申し訳ないので……そうですね、この指輪をお見せください。話を通しておきますので」

そう言って、家紋らしきものが入った指輪が渡される。

「どうも丁寧にありがとう。トティスハイムに行ったときは顔だすよ」

「ぜひに。お待ちしております」

花が咲くような笑みを浮かべると少女はスキップでもしだしそうな雰囲気で馬車へと戻っていった。

フィゴス国内ザルツブルク。

物流、商業など、フィゴス内の経済を担う重要都市である。

ザルツブルクに入ったレイアスは最初の用事、傭兵ギルドへ登録へと赴いた。

「というわけで新規で登録したいんだよ」

「なにがというわけなのかは判りかねますがこちらに名前と年齢、技能を書いてください」

受付をしている女性に用紙を渡された。

ペンを手に取り記入していく。

「レイアス・R・F・ノーティス。16。技能って？」

「使える武器などですね。魔術が使えるばそちらも」

「なるほどね。武器は剣。魔術。」

一度だけ読み直すと、受付嬢に出した。

「レイアス・R・F・ノーティス様ですね。傭兵ギルドへようこそ。説明をいたしますがお聞きになりますか？」

「うん、おねがい」

彼女は、紙を他の職員に渡すと説明を始めた。

「わかりました。まずはランクについて説明します。最低ランクがE、最高がSですがSランクには国の思惑などが絡んでくるので、実質Aランクが最高、と思ってください」

受付嬢は部屋の壁に取り付けてある掲示板を指差した。

「あの大きな掲示板が以来が張り出される掲示板です。自分のランクから二つうえのランクまでは受けられます。

ただランクがひとつ違うだけで難度が跳ね上がるので、実力がついてから上のランクを受けるべきですね。

また、こちらが十分な実力がついたと判断したときは、上のランクを幹旋することもありますよ。

ランクアップは、上のランクをクリアすればそのランクになります。

「

その横の一回り小さい掲示板に、指先が移る。

「あちらはネームドの討伐依頼です。通常個体の強さを逸脱した特殊な個体に名前をつける習慣からネームドと呼ばれる魔物を、ギル

ドが懸賞金をかけて張り出します。
傭兵たちへの警告も兼ねているので、ときどき目を通しておいてください」

「ネームドねえ。……あれ？」

遠目に掲示板を眺めていたレイアスが疑問符を浮かべた。

「どうしました？」

「あのヴォルグとかいうやつ、来るときに遇ったなあって」

「遇ったって、よく生きてましたね。Aランク相当のレベルですよ」

「ふーん。どうでもいいや。続き、おねがい」

レイアスはとくに興味をなくしたようすで続きを促した。

「そうでしたね。ネームドしかり一般依頼しかり、討伐の証拠は、ギルドカードについている機能を使います。死んだ直後の魔物の死体にカードをかざすと情報を記録します。それをギルドで読み取り、確認でき次第報酬の受け渡しとなります」

「便利だね。魔物をもって帰らなくていいっていうのは」

「そうですね。2000年前までは魔物の一部を持ち帰る方式だったのですが」

そのとき、ギルドの職員がカードを持ってきた。

そこには、レイアスの名前とランクが刻まれている。

「ちょうどカードが出来たみたいですね。こちらに血液を垂らしてもらえますか」

「血、かぁ。まあしかたないか。」

外套の内からナイフを取りだし、左手を軽く切りつける。

うつすらと滲んだ血液を押し出してカードに垂らした。

「結構です。ではこれを、」

カウンターの後ろにおいてあった機械において、何かの操作をする
と、ガツンとプレスされ、カードが排出された。

プレスの瞬間マナが感じられることから、レイアスは何らかの魔術
効果が与えられたのだと当たりをつけた。

「こちらがノーティス様のギルドカードになります。念じますと詳細が現れますので確認を」

カードを受け取ったレイアスは、何となく念じるとカードの上に半
透明の枠が現れた。

年齢：16歳

技能：剣技

魔術

能力：身体能力ⅡS

知性ⅡS

精神力ⅡS

性質：風雲児

「なにこれ」

「血液から評価した貴方のステータスです。周りの人には見えないので気にしないでいいですよ」

「そう。説明は終わり？」

「はい。では頑張ってください」

「ん、ありがとう」

カードを外套に仕舞うようにして蔵にしまうと、掲示板の前まで移動する。

現在はEランク。Aまでは、三回は受けなくてはいけない。

なんだかめんどくさいな」

「なにが？」

「え？」

後ろにたっていた女性にきかれとぼけた返事をしてしまう。

「なにがめんどくさいの？」

「えっと、声に出た？」

「うん。ばっちり」

「ありゃ。ま、いいけど。で、なにがめんどくさいかだっけ」

「うん。依頼みてるとおもったら行きなりめんどくさいだからねビツクリしたよ」

「Aランクになるには三回は依頼を受けなきゃいけないんだって」

シンツ……

「あれ？急に静かに……」

「おいてめえ。Aランクまで三回だ？傭兵なめてんじゃねえぞ」

「なんでさ。Dランク受けてBランク受けてA受けるだけでしょ？なにが難しいのさ」

「んだと！Cランクでさえサンドスコピオやワイバーンを討たなきゃなんねえのにBランクときたらワイバーン10頭とかふざけた依頼ばつかだぞ？Aランクにいたってはエレメントドラゴンの討伐だ！」

「だからさ、あんたたちの基準でものを見ないでよ。見てる世界が違う人っているの。外野は黙ってて」

「んだと！」

「ボキャブラリーが貧困だね。

いいよ。三回の依頼でAランクになる。ま、見ときなよ」

レイアスは外套のフードを脱いだ。

瞬間空気が凍る。

空間を支配する絶対強者の気配に指一本動かせない。

フードのなかが子供だったことや、レイアスが整った顔立ちだったことなどは些細なことだった。

町中のギルドに降って沸いた命の危機に傭兵たちは息すら忘れて硬直していた。

「あつごめんごめん。フード外すと隠蔽効果が一部無くなるの忘れてたよ。で、自分がどんな存在に喧嘩を売ったか理解した？」

クスツと美しい顔で微笑むレイアス。普段ならば思わず頬を染めるものもいたかもしれない。

だが今この状況では、悪魔の微笑みにしか見えなかっただろう。

「Dランクだからこれにしょ。お姉さん、これよろしく。あとBとAの依頼用意しといて」

レイアスは手続きを済ませるとギルドをあとにした。

Dリンク依頼

対象：ウルフの群れ

依頼者：フロリア

内容：マトロ村の近くにある森に住み着いたウルフを退治してください。

報酬：委細相談

第二話

森と洞窟と金剛石

マトロ村民家。

「どーも。ギルドから来ました。フロリアさんいますか」

「わたしがフロリアです」

ドアを叩くと栗色の髪をした女性が出てきた。

「あああなたが。えつと俺が依頼を受けたノーティスです。報酬は
委細相談とのことですが？」

「はい。すみませんがあまり多額の報酬は……」

「要りません」

「え？」

レイアスの言葉に、フロリアが硬直した。

「こちらにも諸事情あってね。報酬要らないからギルドには一万グ
ラオ払ったっていいとけばいいよ」

「一万って、そんな大金無理です！」

「いや、払わなくていいって、話聞してる？」

「そんなに美味しい話があるはずありません。なにか裏があるので

しょう?」

「……疑い深いのは美德だと思うけどさ、この場合は面倒なだけだよ。どうすれば信じる? 書面? 誓約?」

「書面にしましょう。」

なかに入り証明書を書いた。

『フロリアは、レイアス・R・F・ノーティスに報酬一万グラオを支払いました。』

「これでいい? 拇印迄したんだから文句ないでしょ。じゃ、さよなら」

そんなのが半刻前。

いまレイアスは森のなかで狼を二メートルほどに大きくしたような魔物に取り囲まれていた。

「探す手間が省けたよ。情報通り七頭」

フードを被ったレイアスは、外套のなかで狼の数だけナイフを取りだし、その場でターンしながら連続して放った。

放射状に軌跡を描いたナイフは全てが狼の眉間に深々と突き刺さる。

「閃光爆ぜろ……」

フードから覗く口を歪めると左手を鳴らした。

フィンガースナップとともにナイフが纏っていた魔力が炸裂。

ウルフラの頭部をまるごと吹き飛ばした。

「汚い花火だ」

ギルドカードを全ての死体にかざすと、記録完了の表示が出た。

依頼の完遂を確認してその場をあとにした。

ナイフを全て回収してから。

ザルツブルク内ギルド支店

ドアの鈴をならして入ってきたフードの少年を見て、騒がしかったギルドのなかが静まり返った。

一度掲示板を眺めると一つの依頼書を持ちカウンターへ。

「これ、確認よろしく。あと次これいくから」

「おいおい、こんなに早く狼退治が終わるわけねえだろ。大方どっかで……」

「確認しました。報酬は受け取られたということですのでよろしいのです

ね？」

「いいよ」

「んな！？」

ざわつとどよめくなか、依頼の手続きを終え、ギルドを出ていく。

「嵐みたいなやつだな？」

「だな。災害レベルってことは確かだ」

そんな会話があったとか。

Bランク依頼

対象：ダイヤモンドタートル

依頼者：とある富豪

内容：ダイヤモンドタートルの甲羅の入手。

報酬：百万グラオ

翌日。

ザルツブルクの北西。

有名なダイヤモンドタートルのすみかである洞窟がある。

高額で取引されるその甲羅だが、ある理由から人が立ち入ることは滅多にない。

その理由が……

「オオオオオオオ……」

「なんの声だろ？」

この声の原因にあるのは間違いない。

レイアスが未だ洞窟の入り口にいるにも関わらず、その声を聞くことができた。

玄武洞。

それが洞窟の名前であり、声の原因が伝説の玄武だという迷信が由来となっている。

「でも、亀って鳴くんだっけ？」

そこは、魔物だつてことで。

「あ、来た」

何かに反応するように顔をあげると、外套から右手を出す。

ナイフが握られたその手をひらめかせると、数頭のコウモリが落ちてきた。

何らかの遠隔攻撃を放ったらしいが、ナイフははまだ手に握られている。

一応コウモリもカードに記録を残しておくとして外套を整え、洞窟に潜っていった。

一刻も歩いただろうか、度々聞こえるなにかの声をあてにして洞窟を進むレイアスは、魔物に囲まれていた。

「また囲まれたか。大技使って洞窟崩れたらやだしな……」

少しの蹲巡の後に、両手を交叉して構えると魔力を操る。

両手の甲から三本の魔力で編まれた爪が生えた。

「いまなら見逃すけどどうする？って、退かないよね。じゃ、さよならってことで」

レイアスの姿がかき消えるとともに、光源となっている爪の軌跡が尾を引く。

軌跡が全ての魔物を縫い止め、命を刈り取っていく。

レイアスがもとの場所に現れたのとともに、光の軌跡も重なり消えた。

「かざしていくのめんどくさいな。いっぺんに済まないもんかな」

カードに念じてみても反応がない。

渋々と魔物の屍にかざして回ったのだった。

玄武洞最奥部。

レイアスの前には巨大な亀がいた。

眠っているようで、そういえばさっきから声がしなかったな等と考えながら、ホールのようになっている所へ足を踏み入れた。

「えーと、無視していいのかな？こつ、ボスと戦う的なのが期待される場面だと思うんだけど」

首を捻りながら大亀の後ろに見える通路に向かう。

結局何事もなく通りすぎたレイアスは、ダイヤモンドタートルのみかにたどり着いた。

「これは……すごいな。幻想的だ」

そこにいたのは、50頭は下らないだろうダイヤモンドタートルの群れだ。

高い天井から差し込んでいる光は甲羅である金剛石に当たり、透き通った輝きとなる。

「出来れば殺したくないけど、ごめんね。これ、依頼なんだよね」

詫びとともにナイフを取り出そうとしてふと、目の端になにかが映った。

「あれは……死骸か！ダイヤモンドは死んでも変わらない。ならあつちから持っていけば……」

殺さなくてもいい。

ナイフをしまいこむと、すでに死に、甲羅だけとなったダイヤモンドを持ち、来た道を引き返した。

ホームを抜けようとしたところで大亀が起きていることに気がついた。

「あ、おはよう。あなたって、玄武なの？」

「それは……我が子の骸か？」

母亀らしき大亀は、レイアスが小脇にはさんだ甲羅を見て問いかけた。

「ええと、まずい？」

「……その外套はどうやって手に入れた？」

レイアスは外套をつまむように少し持ち上げると首をかしげた。

「これ？家の母が昔使ってたらしいけど？300年前くらいに」

「フェイルノート………ならば許そう。生きた子等を手にかけなかったことに対する褒美と、お前の母に対する恩への報いだ」

「ありがとう。ところで母さんの知り合いなの？」

「なに、300年前に借りがあるだけだ。大した事ではない」

レイアスはなおも聞いたそうだったが母亀の態度をみて諦めた。

「あいつは……フェイルノートは想いを遂げたか？」

「父さんを射止めたってことなら遂げたんじゃない？」

「リオルティスを射止めたか……やるもんだ」

表情に変化はないが、語調から笑った気配がした。

「それじゃあ行くから。また来るよ」

「そうか。今度は土産のひとつでも持ってこい」

「はは、善処するよ。さよなら」

そしてレイアスは、玄武洞をあとにした。

「こんなところで母さんの熱愛の裏付けがとれるとは。となると他の話も信憑性持ってくるなあ」

「へくちっ！」

「どうしたイニス。風邪か？」

「ううん。レイアスが噂でもしてるんじゃない？」

「そうか。あいつ、少しは俺たちの話を信じる気になったかな？」

「まだでしょう。きっと今ごろはAランクになるには三回も依頼を受けなきゃいけないのかと思ってる頃よ」

「あいつならあり得るな。いやもうそうとしか思えない」

楽しそうに笑う元魔王と元勇者だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0211z/>

二極の子～乱世風雲児～

2011年12月3日20時54分発行